

研究題目	中間報告 (パイプオルガンの新機能と電子音響が生み出す新たな音世界)	報告書作成者	佐川 淳
研究従事者	佐川 淳		
研究目的	<p>2017年に同志社中学校・高等学校グレイス・チャペルに完成したパイプオルガン(以下、パイプオルガンのことを「オルガン」と表す)の計画初期段階に楽器の構想を練っていた私は、オルガン製作の長い伝統に則った工法の良さを残し、歴史的なオルガンに特徴的である荘厳な響きを重視する一方で、現代のオルガン音楽やオルガン演奏の可能性を広げる試みがしたいと思い、オルガンにいくつかの特殊機能を付加させることに決めた。ここで特殊機能というのは、マリンバとカリヨンという2種類の打楽器と、オルガンの送風をオルガニストがコントロールできる「送風絞り(Winddrossel)」という装置、また一つの鍵盤に対して同オルガンの他の鍵盤からインターバル(音程)単位でカバー(鍵盤の結合)できる「インターバルカバー」と呼ばれる機能、そしてMIDI機能などのことである。ここでは、MIDIを除く全ての機能が、おそらく世界的にも珍しいものであると言える。これらは現代音楽の演奏やオルガン演奏でしばしば行われる即興演奏の際に、驚くほど演奏の可能性を広げることができる。しかし、こうした機能や近年少しずつ数を増やしつつある現代的なオルガンの存在については、一般的にあまり知られていないことが多く、またその機能の有用性について十分な評価が得られていないと感じる。</p> <p>同志社のオルガンに設置された特殊機能は、ケルンの聖ペーター教会に設置された「世界で最も現代的」と称されるオルガンを参考にしている。私はケルンに留学していた時にこの楽器に出会い、その前衛さと楽器が持つ可能性の大きさに驚愕しつつも、現在まで魅了され続けている。この教会では2004年のオルガン完成以来、数多くの作品の世界初演が行われ、ドイツのテレビやラジオといった多くのメディアで紹介されている。世界から多くの演奏家を招いた国際オルガン音楽フェスティバル「オルゲルミクストゥーレン(Orgel-Mixturen)」は2005年以降現在まで継続され、2019年に私がゲストオルガニストとして参加した際には、フェスティバルを通じて電子音響(エレクトロニクス)が多用され、なかでもドイツの気鋭の電子音楽作曲家、トビアス・ハーゲドーンによるオルガンと電子音響のための2作品「静止と進行(Stehen und Gehen)」、「立地点(Standpunkte)」と、ハーゲドーンが自ら製作した操縦棒ジョイスティックを使用し、MIDIで接続してオルガン鍵盤に触らずオルガンを演奏する「方向(Lichtungen)」は強い印象を与えた。日本においてはそもそも、オルガンそのものの認知度が高いわけではない。しかしだからこそ、これからの音楽の在り方を模索する試みをオルガンという楽器を通して行い、演奏会という形で世に出すことには大きな意味があると感じる。本研究は上述の作曲家、T.ハーゲドーンを招き、同志社のオルガンの特殊機能と電子音響を融合させ、オルガンから引き出される知られざる響きと電子音響による新たな音世界の創出を試みると共に、MIDIを活用し、演奏台に触れない新しい「オルガン演奏」の提案を、演奏会実施という形で実現させたい。</p>		

<p>研究内容</p>	<p>本研究は同志社中学校・高等学校のオルガンを用い、送風絞り(Winddrossel)やマリンバとカリヨンの打楽器ストップ、音程単位で異なる鍵盤のパイプを結合させるインターバル・カプラー、MIDI 接続などの特殊機能を有するオルガンを、電子音響(エレクトロニクス)、コーラスといった別の発音形態と組み合わせて、その音の響きを融合させる公演の実施を核としている。</p> <p>2020年に始まった新型コロナウイルスのパンデミックにより、来日を予定していたトビアス・ハーゲドーンの渡航の見込みが立たず、研究助成は2年延期されている状態にあるが、以下に当初予定していた公演のプログラムを再度記すことにする。</p> <p>タイトル:「響きの接点」～オルガン×エレクトロニクス(電子音響)×コーラス～</p> <p>会場:同志社中学校・高等学校 グレイスチャペル(収容人数約1000人), 入場無料</p> <p>オルガン:佐川 淳 エレクトロニクス・監修:トビアス・ハーゲドーン</p> <p>コーラス:ヴォイスペクティヴ×ホザナコーラス(プロの音楽家グループと学内のコーラス部との合同メンバー)</p> <p><プログラム>*ただし、上演するコーラス作品等は若干の変更もあり得るものとする</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アレルヤ Alleluia (ア・カペラ) / エリック・ウィテカー 2. 立地点 Standpunkte (オルガンと電子音響)/ トビアス・トビット・ハーゲドーン 3. 習作2 Studie Nr.2 (トビアス・ハーゲドーンにより構成)/ カールハインツ・シュトックハウゼン 4. 静止と進行 Stehen und Gehen (オルガンと電子音響)/ トビアス・トビット・ハーゲドーン 5. 線 Linien (4人のスマートフォンプレーヤー)/ トビアス・トビット・ハーゲドーン 6. インプロヴィゼーション(MIDIとオルガン)/ トビアス・トビット・ハーゲドーン 7. 接線 Tangenten (8声部のアカペラと電子音響)/ トビアス・トビット・ハーゲドーン <p>トビアス・トビット・ハーゲドーンはトビアス・ハーゲドーンの作曲家名である。</p> <p>ハーゲドーンは京都に約1週間滞在し、会場での準備を進める。特にプログラム番号5の「線 Linien」では、4人のスマートフォンプレーヤーは学内生から希望者を募り、ハーゲドーンと共同で準備する。会場には1階席、2階席にスピーカーを最低計6台設置し、コーラスの声、オルガンの音、スピーカーからの音が高い天上のチャペルの会場全体の異なる位置から音が鳴るように物理的な工夫、そして演出上の工夫を凝らす。ア・カペラコーラスの暖かみのある和声的な響きから、エレクトロニクス(電子音響)による響きまで、様々な質の音が単独で響いたり、あるいはぶつかったり溶け合ったりする面白さをコンサートを通して表現することを狙いとしている。</p>
-------------	---

研究のポイント	<p>① 日本ではあまり例のない特殊機能を備えたパイプオルガンを用い、伝統的なレパートリーの演奏では引き出すことのできないオルガンの未開拓な音色の可能性を追求すること。特に、MIDI 接続を介してコンピュータのプログラミングを活用した複雑な演奏、特に人間の能力では演奏不可能な内容を、電子音ではなくパイプからのアコースティックな音で響かせる試みは、デジタルとアコースティックの融合という観点で非常に興味深い。</p> <p>② パイプオルガンの音色とエレクトロニクス(電子音響)の音色を組み合わせた作品の上演は、①の試みとは異なりアコースティックの音と電子音を同時に鳴らしつつ、その音色の境界が明確になったり曖昧になったりするところに面白さがある。</p> <p>③ 伝統的なオルガン演奏は、演奏内容が作曲者によりほぼ固定されていることが多い。一方でハーゲドーンのス마트フォンを用いた作品や、MIDIとオルガンを用いたインプロヴィゼーションは、演奏者のアクション(動きや操作)と得られる響きの間にプログラミングが介在しており、プログラミングの特性上どのような響きが得られるかが演奏者に正確に予測できないところが多い。演奏者は響きを聴きながら次のアクションを繰り出すため、作品そのものには一定の偶然性が含まれているところがユニークな点である。そして、オルガンの演奏台から離れ、楽器に直接触れぬ状況でオルガンを鳴らすということにも面白さがある。</p>
---------	--

研究結果

オルガンの新機能を活かした新たなタイプの演奏会実践を研究の主題としていたが、COVID の長期間にわたる世界的なパンデミック、そして新種株の流行などにより、演奏会の実現見通しが立たない状況が継続している。結果的に公演の実施はさらに一年再延長し、状況が変化するのを待機している状態である。演奏実践が滞る一方で、20 世紀後半以降のオルガン製作の新しい動向についてはヨーロッパを中心に興味深い動きがある。私自身、この間の時間を利用して音楽学的な立場から研究を進めることができ、以下にその内容を簡単にまとめたい。

特に 2000 年以降のオルガン製作の新たな動きが、ドイツを中心に最近高い注目を集めている。2021 年 12 月に発刊されたドイツの音楽雑誌「新音楽時報 (Die neue Zeitschrift für Musik)」は「ハイパーオルガン (Hyperorgel)」という聞きなれない言葉をメインテーマに定め、1920 年代にアルザス地方から興った「オルガン運動」(Orgelbewegung)を意識して名付けられた「新しいオルガン運動」(Die neue Orgelbewegung)という表現とともに、伝統的なオルガン製作の技術を重視しつつもデジタル技術を駆使した新しいタイプのオルガンの数々と、それらを用いた最近のプロジェクトが紹介されている。(Hans Fidom, Die Aufbruch ins 21. Jahrhundert: Die neue Zeitschrift für Musik, Schott, 2021/04)

また同じ時期に発刊されたドイツのオルガン専門雑誌「Organ」においては、ドミニク・ズステック (Dominik Susteck) がドイツの教会を中心に数を増やしつつある革新的なオルガン製作の事例と、今回の研究助成で来日を予定しているハーゲドーンの実践例などを挙げながら現代の新しい実践の新たな傾向を紹介しつつ、一方でコンサートホールにおけるオルガンの仕様設計については未だ保守的であると批判する記事を寄せている。(Dominik Susteck, Orgel quo vadis? :Organ 2021/04, Schott)

上述の「新音楽時報」によれば「ハイパーオルガン」というのは特に、MIDI 接続とデジタル技術を用いて従来のオルガン演奏の可能性を大きく押し広げる機能をもつオルガンを指すと解釈できる。(Fidom)アムステルダムでの演奏会施設、オルガンパーク (Orgelpark) では、こうした技術を用いてスウェーデンのピーテオ (Piteå) にある大オルガンと同時に接続して相互に演奏した実践例があり、こうした試みを発展的に継続している。MIDI とデジタル技術の応用という点では、アーティストデュオ Gamut inc によるプロジェクトもドイツで高い注目を集めている。彼らは MIDI とコンピュータのプログラミングを組み合わせることで、人間の身体能力では演奏し得ない内容をオルガンのパイプから発音させようとする。Gamut inc は 2022 年 5 月にゲーティンステイトヴィラ鴨川の招聘アーティストとして来日予定で、京都滞在中に同志社中高のオルガンを用いた非公開の演奏実践をいくつか予定している。本研究助成により企画している公演では、これに技術的にはほぼ同じ手法を用いたトビアス・ハーゲドーンの作品を上演予定しており、ハーゲドーンの一連の試みも現代的なオルガンを用いた実践の新しい方向性を示すものの一つとして位置付けることができる。

今後の課題	<p>パンデミックの影響でアーティストの渡航や会場使用の見通しが立たずに2年の延長をしている本研究だが、2022年度こそ何等かの形で公演を実現したいと考えている。パンデミックをめぐる状況は月日の経過とともに確実に変化しており、特に渡航に関しては今年に入り少し可能性が見えてきてはいる。とはいえ今年3月に始まったウクライナ・ロシア問題は渡航をめぐる新たな問題になっており、新型コロナウイルスについても更なる新種株の拡大への懸念も大きい。飛行機の欠便や減便、飛行時間の延長、コロナ感染による隔離期間の発生の可能性など、憂慮すべき事柄は沢山ある。</p> <p>このような状況であるので、元々予定していた公演内容に固執しては、実現可能な時期まで更に数年待つ必要がでてくると感じている。現在は、おかれた状況の中で可能な演奏内容や公演のスタイルに柔軟に変更できるように準備する必要があると考えている。例えば会場となる同志社中高チャペルは、感染拡大予防のため未だにイベントへの来客を許していない。本校の感染対策そのものは2022年に入り若干の緩和傾向が見られるもののイベント開催の可能性は未だ見えず、現段階ではコンサートを配信する、あるいは事後に視聴できるコンテンツを収録するといった手段に置き換えるしかないと思われる。</p> <p>また、学内生徒と教員を除いた学外の人間との接触も未だに許可されていない。このため、この公演で予定しているハーゲドーンと生徒とがスマートフォンを用いて共演する内容も変更の必要がある。さらに、コーラスと電子音響(エレクトロニクス)のための作品「接線(Tangenten)」についても同様の理由で実現が難しいと想定される。また、現在の状況では渡航費用が当初見積もっていた額よりも大幅に増える見込みで、渡航の際に必要とするPCR検査、隔離場所の確保とその費用など、必要経費の増加が想定されている。これらに対しても何等かの方策が必要である。</p>
-------	---